

2017-December No.110

日本大学桜門建築会

<http://www.okenkai.jp/>

特集「まちづくりの現在」より



「再生古民家」浦部智義



「ヨコハマみなとみらい21の水辺」菅原遼



「まるがやつ」平田麻実



「ワカミヤハイツ」落合正行



「渋谷キャスト」後藤将人

contents

特集◎メールアンケート まちづくりの現在——2

浦部智義 落合正行 後藤将人

岡野健太郎 菅原遼 平田麻実

もうひとつの世界から◎根付彫刻 野口悦宏——9

短期連載◎さよなら5号館——10

第1回 意匠設計者のことば

追悼◎小林美夫先生 山口廣先生——12

事務局だより——14

学部ニュース——15

まちづくりの現在

過去2号において「構造設計者の思想」「環境エンジニアの思想」と題したアンケートを試み、エンジニアのオリジナリティをあぶり出すものとしてたいへん好評だった。今回の特集では、さらに視点を変えて、都市計画分野(まちづくり)に焦点を当て、一線で活躍されている卒業生や教員のみなさんにアンケートをお願いした。東京都心部の再開発に代表されるような「街」も、東日本大震災以後の東北の復興に代表されるような「町」も、いずれも「まちづくり」の射程には含まれている。そして、これらの計画も「思想」と呼ぶべきものは存在している。さらに、まちづくりの現場では「ものづくり」と同時に、さまざまな活動などの「ことづくり」も行われている。そんな「現在」のまちづくりに日々奮闘する人たちのことばに触れることで、これからの建築とまちのあり方を改めて考えたい。(佐藤慎也/広報委員会委員長)

7つの質問

- Q1. この分野を選んだきっかけになった建築物やまち、もしくは活動などがありますか。
- Q2. ご自身が設計あるいは計画者として関わった中で、もっとも気に入っている建築物やまち、もしくは活動などをあげてください。
- Q3. 東日本大震災などの災害を経て、まちづくりに対する意識の変化が起きましたか。
- Q4. さまざまな技術が進化していますが、まちづくりにどのような影響を与えているのでしょうか。
- Q5. あなたにとって「魅力的なまち」とはどのようなものですか。
- Q6. まちづくりに関わる人材を育てるという視点で、自身の経験の中からなにか感じたことはありますか。
- Q7. まちづくりの活動に、日大卒業生であることが直接的または間接的になにか影響を与えましたか。

回答者



URABE Tomoyoshi
1969年大阪府生まれ。東京電機大学大学院修了後、同大学非常勤講師・日本学術振興会特別研究員などを経て、2005年日本大学工学部建築学科講師、10年より准教授。専門は建築計画・施設計画。福島県内の被災・過疎自治体のまちづくりに関わる一方、地域の拠点となる施設づくり「地形舞台」「針生ほしつばの家」「希望ヶ丘プロジェクト」など多数参画。主な受賞は、グッドデザイン賞金賞、東北建築賞作品賞、日本建築学会奨励賞、福島県建築文化復興賞など。



OKANO Kentarou
1985年茨城県生まれ。2009年日本大学工学部建築学科卒業、11年同大学院工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。同年鹿島建設入社、東京建築支店・東京駅八重洲口開発工事(現グランルーフ)に赴任。12年東北支店異動、総合病院・製薬工場・震災復興案件などを経験し、現在は福島県内で震災の被害を受けた施設の移転新築工事に従事している。



OCHIAI Masayuki
1980年三重県生まれ。2003年日本大学理工学部建築学科卒業、05年同大学院工学研究科建築学専攻博士前期課程修了、05～11年山中新太郎建築設計事務所、11年PEA...設立、12～14年日本大学理工学部理工学研究所研究員、14年より日本大学理工学部まちづくり工学科助手。専門は建築計画・設計。主な受賞は、16年東京建築士会第2回これからの建築士賞、17年日本建築学会作品選集新人賞。



SUGAHARA Ryo
1987年神奈川県生まれ。2010年日本大学理工学部海洋建築工学科卒業、12年同大学院工学研究科海洋建築工学科専攻博士前期課程修了、博士(工学)。同年長谷工コーポレーション入社。15年日本大学理工学部海洋建築工学科助手を経て、17年より助教。専門は親水工学、地域計画。市民組織「水辺荘」理事。主な受賞は、15年環境情報科学センター・学術論文奨励賞、同年日本沿岸学会・論文奨励賞。



GOTO Masato
1984年新潟県生まれ。2007年日本大学理工学部建築学科卒業、09年同大学院工学研究科不動産科学専攻博士前期課程修了。同年大成建設入社。10年都市開発本部プロジェクト開発第二部に配属、練馬駅北口有地活用事業や宮下町アパート跡地事業などの公有地活用事業の推進などを担当。16年同本部都市再開発第一部に配属、市街地再開発事業の推進を担当する。



HIRATA Mami
1989年千葉県生まれ。2012年日本大学生産工学部建築工学部居住空間デザインコース卒業。同年アキュラホームに入社。住宅の現場監督を経て16年に「人と古民家」に入社し、古い民家の保存を通じたまちづくりに参画する。

Q1

この分野を選んだきっかけになった建築物やまち、もしくは活動などがありますか。

浦部●学部生の時に、オーディトリウムを計画・設計する課題があり、指導の先生の影響で東京文化会館をサーベイしたり、ゼミかなにかで著名な建築の平立断面図をトレースして、空間分析をしました。その時に、ダイナミックな空間や諸々の設計の工夫などに触れたことで、特に文化施設に興味をもって建築計画の入り口に立った気がします。その延長線上で、工学部に赴任してから地方特有の施設と地域づくりの関係性に注目するようになり、より面的に展開していきました。

落合●幕末、ペリー率いるアメリカの黒船艦隊が来航したといわれる静岡県下田市の港町には、この地域で採れる伊豆石や、瓦と左官でつくるなまこ壁など、地域固有の歴史的建造物が多く残っています。一方で、少子高齢化、若者不足などから、空き家となったり、取り壊されたり、変わりゆく「まち」の姿を目の当たりにしました。2008年、私は本学大学院を修了後、設計事務所に勤務しながら、所属していたNPO地域再生プログラムの一員として一緒に下田の旧町内に残る1軒の古い蔵を借り、実際に建物を使いながら地域の歴史的建造物の保存・活用策を探る「くしだ蔵プロジェクト」を始動。この活動は2年間続きましたが、そこで痛

感したのは、建築物ひとつでは「まち」は変わらないということでした。つまりは、社会構造から考えていく必要があることを、身をもって実感。おそらく、このことが契機で、まちづくりの分野に引き込まれていったのだと思います。

後藤●都市開発の分野を選んだのは、北千住の再開発がきっかけです。学生時代、千葉県松戸市で過ごしていましたが、市の中心であるはずの松戸駅周辺の都市更新がほとんど進まず、都市の活力が徐々に失われていく感覚をもちました。一方、常磐線快速の隣駅の北千住駅では西口再開発が完成し、旧知のまちが大きく変化しました。当時、松戸店・北千住店双方の居酒屋でアルバイトしており、再開発後の北千住駅周辺はまちの活力(店の売上)が高まり、都市開発のチカラを実感。都市計画・都市開発の分野に興味を抱きました。

岡野●茨城県つくば市で生まれ、高校まで住んでいました。つくば市は、私が幼い頃はまだ発展途中の地方都市でしたが、別がつく十代後半頃は整然と区画されたまちに大きく変貌を遂げていました。「建築ってすごいな!」と感じ、いつか自分もつくる側になりたいと考えたのが建築界を目指したきっかけと記憶しています。

菅原●この分野に関心をもったのは、

卒業・修士論文の研究テーマとして、都市部の河川・運河の活用に向けた「水辺の社会実験」の事業評価に取り組んだことがきっかけです。それは、行政と民間が連携して都市の水辺の賑わいづくりを展開する取り組みであり、そこに関わる組織・団体ごとの社会的立場や考え方が複雑に絡み合うことで、取り組みの進展および停滞に大きく影響を与えているのが実情です。特に広島市「水辺のオープンカフェ」や大阪市「北浜テラス」の事例では、都市の水辺を豊かな空間にしたいという思いをもつ地域組織が中心となることで、地域特有の賑わい創出につながり、こうしたプレーヤーの存在・役割が水辺のまちづくりを展開していく上で重要となることを実感しました。

平田●建築に進んだのは、幼い頃、世界遺産にもものすごく魅力を感じ、そこから建築へ興味を湧いたためです。最初は大学で住宅をメインに学んでいたのですが、住宅メーカーに就職し、現場監督をしていました。その後、転職を考えていた頃、話をうかがった設計事務所の今の代表の方に、「古民家の維持・保存活動に興味があれば一緒に仕事をしないか」と、声をかけていただいたのです。学生時代から古い建物に興味があり、転職を決意しました。

Q2

ご自身が設計あるいは計画者として関わった中で、もっとも気に入っている建築物やまち、もしくは活動などをあげてください。

浦部●福島県の山間地域にある天栄村湯本地区で行った、智恵子邸と呼ばれる古民家の再生とその外構整備が、施設と地域づくりとの関連で思い入れがあります。ワークショップなどで決めた施設の設置目的は、文化創造活動や地域を結びつける日常利用も意識した地域の拠点施設で、関係者間では、「地形舞台・中山間地過疎地域に寄り添う集落づくり拠点-」と呼んでいました。山間地の集会施設とまちづくり活動を

テーマに、つくるだけでなく運営もフォローするという意味では、多面的に関わった最初の事例です。過疎や高齢化によるコミュニティ維持の難しさなど、特に地方では避けられない問題に取り組み、いろいろと考えさせられました。

落合●2014年から取り組んだプロジェクトに、足立区西新井に建つ築40年の木造賃貸アパートを、菜園つきのコレクションハウジングに改修した「ワカミヤハイツ」があります。8戸あった

住戸を7戸に減らし、その1戸を共用のコモンルーム(キッチン・ラウンジ)に変え、目の前の駐車スペースを共用菜園にしました。農や食を通じて自らの暮らしを運営する集合住宅へのリノベーションです。このプロジェクトを単体の建築物の改修に留めず、近隣の遊休化した空き地を貸し農園に活用した「いこうファーム」と連携し、「まちぐるみのプロジェクト「あだち農まちプロジェクト」」として展開しました。空

き家や空き地に対して、今の社会環境に即した活用策を提示し、地域のイメージを変えることが、地域の価値を上げることにつながります。先にあげた、社会構造から考えるプロジェクトの一例として示すことができたという想いもあり、気に入っています。

後藤●事業コンペから竣工まで企画提案・事業推進業務を担当した練馬駅北口区有地活用事業(ココネリ)と、宮下町アパート跡地事業(渋谷キャスト)です。ココネリは、練馬駅北側に位置する区有地に定期借地権50年を設定、民間事業者が建物を建設、一部を区施設として練馬区に売却する事業です。当時、区に1床もなかった回復期リハビリ病床に着目し、回復期リハビリ病院+区施設+商業からなる官民複合拠点を実現しました。渋谷キャストは、都営住宅跡地に定期借地権70年を設定、民間事業者が複合施設を建設・運営する事業です。立地を活かし、「住む、働く、くつろぐ。多様性を受け入れ、創造性を誘発する空間」を施設コンセプトに商業+多目的スペース+シェアオフィス+オフィス+コレクティブハウスなどのクリエイティブ拠点を実現しました。これらは公有地だからこそ、本当にまちに必要な機能や、まちのさらなる発展につながる機能を導入できたと考えています。

岡野●質問の主旨と少し外れますが、私が直接関わった福島県富岡町の廃棄物処理施設です。当時(2014年)の富岡町は、避難指示区域に指定されていました。制限が多い中の工事で、規模

も大きく非常に繁忙だったことを記憶しています。現在この施設は稼働中ですが、今年4月に一部を除き富岡町の避難指示が解除されました。復興の一助として、当工事に関わったことがいちばんの印象として、今でも心に残っています。

菅原●最近、横浜の水辺利用を目的とした市民活動の活性化に注目しています。1980年代以降、ウォーターフロント開発がなされた横浜市・みなとみらい21地区では、水辺が新たな都市環境資源として再認識され、水辺を舞台とした市民と行政の連携による水辺利用の取り組みが活性化してきています。私自身も横浜の水辺利用を推進する市民組織「水辺荘」の活動を継続的に取り組んでいます。ここでは、横浜の水辺の賑わいづくりの一環として、SUP(スタンド・アップ・パドルボード)やEポートを用いた身近な水上アクティビティの体験活動や、横浜の水辺のまち歩きを通

浦部智義さんが関わった福島県天栄村の再生した古民家。2014年には、施設の屋内で落語会を企画し、80人の住民が集まり、落語を楽しんだ



じた水辺利用の提案など、行政や企業、市民団体と連携しながら活動を展開しています。横浜は、山下公園や新港パークなど魅力的な水辺がたくさんありますが、そうした水辺の魅力を引き立てる市民活動が、数多く展開されていることも特徴だと思います。

平田●いちばん思い入れがあるのは「まるがやつ」です。千葉県大多喜町下大多喜は過疎化指定されたまちで、そこで10年以上空き家になっていた築200年の古民家を改修し、宿泊施設として生まれ変わらせ、地域活性化をはかるというものでした。古民家を生まれ変わらせる過程でも、なるべく地元の方に施工してもらい、宿泊施設として稼働してからは地元の方を雇用し、来訪者には地場の食材でもてなす。そんなスタイルで運営しています。このような地道な活動が、過疎化の進むまちの本当の地域活性化の第一歩となればと思っています。

Q3 東日本大震災などの災害を経て、まちづくりに対する意識の変化が起きましたか。

浦部●福島県では、東日本大震災(3.11)およびその後の原発事故の影響で甚大な被害を受けましたが、同地域にある大学として、まちづくり的なことも含めて復旧復興に貢献できないかと考えました。3.11前は、時代背景や自分ができる範囲も鑑みて、「小規模」や「身近」といった意識が強かったのですが、3.11

後は、木造仮設住宅団地の建設や復興まちづくりに関わることで、結果的に「大規模」や「広域」なものに関わるようになりました。そのような経緯から、例えば木の利用促進など地域の特性や過去から未来につながる時系列的な意識がより強くなったと思います。

落合●東日本大震災から2年後、2013

年に私は本学の教員らとともに、石巻市雄勝半島という15の浜と集落をもつ地域に入り、高台移転の住宅地の計画や、集会施設の計画に携わりました。そこで再確認できたことは、地縁というコミュニティがいかに重要かということ。各集落は漁村でしたから、生業での結束力は強く、村という単位で復

興に向かう力強さはすごいものを感じました。一方で、私たちが住む都市部では、地縁型のコミュニティは崩壊しているといわれますが、決してそんなことはないと思います。むしろ震災を経験すればするほど、地縁型のコミュニティの重要性は増していくはずです。海拔からの高さや、津波に強固な施設など、目に見えることが優先されますが、このようなコミュニティをどのように考えていくかは、今後のまちづくりにおいて一層重要になるとともに、私自身も震災を経験して、今では「都市の中のローカリティ」を探究する研究を進めています。

後藤●当たり前ですが、人がいるから都市があるので、人びとが安心して暮らせる環境づくりがまちづくりの責務だと考えています。今後、発生が予想される首都直下型地震が起きた場合、首都圏は甚大な被害を受けることが予測されています。東京では、老朽化が進む木造密集地の解消が急務となっている一方で、一定規模の都市開発を行う場合は、帰宅困難者受入スペースや防災備蓄、エネルギーの自立化などが求められ、災害時対応も着々と進んでいます。人びとが笑い合って暮らすためには、まちの魅力や活力の創出も必要ですが、3.11以降、安全で安心できる環境づくりがその前提にあることを改めて実感し、まちづくりに取り組んでいます。

岡野●入社する直前に東日本大震災が発生し、私は福島県内でこの震災を体



落合正行さんが関わった「ワカミヤハイツ」。上は住戸の内観。1階の各戸は土間が設けられている。右は、コモンルームのラウンジ。庭で採れた野菜をここで分けたり、調理したりする

験しました。当時、郡山市に住んでいましたが、いくつか建物は半壊し、道路や橋は隆起しているような状況で、自然災害の恐ろしさを目の当たりにしました。入社後2年目に東北支店に赴任したのですが、復興支援のための物件を数件経験させていただきました。今後も「まちづくり」のための足掛かりに、復興支援というかたちで携わっていきたいと思っています。

菅原●東日本大震災発生後、岩手県宮古市・重茂地区の漁村集落の被災状況調査を行いました。多くの漁村集落が深刻な被害を受けていた中で、姉吉地区という集落では、建物被害が1軒もない最小限の被害に留まっていました。同地区では、明治三陸地震および昭和三陸地震で津波被災経験を受け、海拔60mの地点に「此処より下に家を建てるな」と刻まれた石碑を建造し、その教えを現代まで守り抜いてきたため、東日本大震災時の被害軽減につながりま

した。海は私たちの日常生活に、資源や憩いなどの恩恵を与える一方、津波や洪水などの脅威を与える側面ももっています。姉吉地区の長年の海との付き合い方にみられるように、海の恩恵・脅威に柔軟に対応し、それをまちづくりへと発展させていくことが重要だと認識するようになりました。

平田●私はちょうどその年に就職活動をしていて、都心部の交通やライフラインの脆さを実感しました。東北の友人が辛い想いをしている話も聞きました。その時私は東京駅近くのオフィス街のビルの中にいたのですが、怪我ひとつせず、ガラス1枚すら割れていないことに気づきました。私は前職から今の仕事にかけて住宅をメインに仕事をしてきましたが、都市計画という大きなものでなくても、一つひとつの建築物をいねいに安全につくっていくことから、安心で安全なまちづくりは始まるのだと思いました。

Q4 さまざまな技術が進化していますが、まちづくりにどのような影響を与えているのでしょうか。

浦部●木の利用促進など「縦ログ構法」にチームで取り組んでいます。例えば、地域産業にも影響を与えるような新たな構法などは、川上から川下まで産業をつなげることにも発展し、地域を活性化することから、結果として、まちづくりにもよい影響を与えていると思います。まちづくりという視点は、住まいやコミュニティといった視点だけでなく、産業やビジネスの創成が基盤になることも多い。3.11後の復興事業

も場所によっては、そのような視点からまちづくりを始める場合もありました。また、建築技術の発達で可変性や代替可能性が生まれてくると、同じ場でもさまざまな活動が混合・複合できることで、新たな効果や刺激が生まれやすいと考えます。

落合●技術進歩の中でも、やはり情報処理の進化は特段に早い。例えば、Google MAPは今やスマートフォンの端末でだれでも閲覧でき、それを片手

にまちを思い通りに歩くことができます。さらに、マップ上にはさまざまな情報が転がっていて、その場その場で編集でき、オリジナルの地図をつくることができます。これによって、ユーザー側のリテラシーは格段に向上していると思われれます。いろいろな地域でワークショップを実施しても、参加者の地図を読む力やまちへの理解は早くなっています。後は、このツールをいかに幅広い世代で使いこなせるか。こ

こは人力で広めていく必要があると考
えます。

後藤 ●例えば、AmazonなどのEC（電
子商取引）サイトの台頭で外環や圏央道
沿いに物流施設の整備が進み、物販店
舗にも影響を与えていることなど、新
たな技術の誕生は都市の構造自体に大
きく影響を与えると考えます。今後、
IT技術がさらに発展し、在宅勤務が進
み、働き方が変われば、都心のオフィ
ス需要や郊外の住宅地のあり方も大き
く変わるでしょうし、車の自動運転技
術が進めば、都市の骨格である道路
のあり方も変わるでしょう。それによ
り渋滞がなくなれば、鉄道駅を中心と
したまちづくりの考え方も変わるかも
しれません。これまでの歴史が物語っ
ているように人どもの動きが技術によ
って革新すれば、都市の構造も大き
く変わっていくと考えています。

Q5 あなたにとって「魅力的なまち」とはどのようなものですか。

浦部 ●まちに寄与する建築である可能
性のひとつは、それをつくる時に存在
するわかりやすい背景だけでなく、そ
れを超えた活動が行われる場所となる
ことで建築も長持ちするし、まちもお
もしろくなると思います。少子高齢化・
縮退化する時代でも、余白や変化がな
いと息苦しいでしょうし、一見ある目
的のためにつくった建築が、時に違っ
た公共性をもった建築になれるよう
な、柔軟性が求められている気がし
ます。そういう多様な活動を展開でき
る建築が、結果的にまちづくりに必要
な公共性をもつ人や活動を育て、魅
力的なまちにつながる気がします。

落合 ●そこに住む人や動きにきている
人などが、生き生きとしている「まち」

岡野 ●建築技術の進歩により、最近で
は免震・制震技術を使った病院や市庁
舎が増え、従来は建物を建てること
が難しかった超軟弱地などにも建てら
れるようになってきました。また、超大
スパンの大型構造物の施工が可能にな
るなど、材料や技術の進歩によってさ
まざまな形状の建築物が出現してい
ます。こうした技術面の進歩は、現実
に「つくる」ことへの自由度を増し、
人びとの多様な要求にかなったもの
を「創造」し、より理想に近い建築
物や空間を提供できるようになったと
考えています。
菅原 ●近年のまちづくりは、Facebook
やTwitterなどのSNSを活用した情
報発信が拡散的になされ、従来のよ
うな地域住民を中心とした地縁型の
つながりによるまちづくりだけでなく、
嗜好性を重視したテーマ型のつなが
りを中心とした取り組みが展開され
つつある

が「魅力的なまち」だと思います。生
き生きしていることは、その地域を
いかに好きか、愛しているかで変わ
ります。その地域愛を専門用語で「シ
ビックプライド」といいます。この概
念は19世紀のイギリスが発祥といわ
れ、ヨーロッパを中心に、シビック
プライドを育むさまざまな活動が行
われています。中でも建築物に目を
向けた取り組みがいくつかありますが、
近年わが国でも、建築家とその地域
の建築物をめぐる「建築ツーリズム」
が増えてきました。観光事業の一環
として、まちづくりの大きな柱にし
ている地域もあります。先の地図と同
様に、住民の「まち」へのリテラシー
を上げていく活動が必要不可欠です。
それが、建築物や「ま

ち」への理解を深め、ひいては「魅
力的なまち」をつくっていくと思
います。
後藤 ●都市や建築の歴史を活かしな
がら、新陳代謝が進むまちが魅力的
だと考えています。ここでいう新陳代
謝とは、歴史的な建築物などがコン
バージョンなどで活用される一方で、
最先端の建物も再開発などで生まれ、
街角では小さくても魅力的な店舗の
出店が進むような状態をイメージし
ています。人びとの豊かなライフス
タイルと愛着をさらに醸成していく
活動があって、その新陳代謝は生ま
れると考えています。その舞台とし
て、広場や公園などの公共空間の活
用が注目されています。行政の後押
しもあって、近年は都市開発にと
もない整備される空き地も単なる歩
行空間ではなく、賑わい拠点として
整備され始め、公園ではPFIなどで
民間事業者による賑わいづくりが促
進されている状況です。都市の新陳
代謝を促す仕掛けのひとつとして、
誰もが使える公共空間の質を高めて
いくことは、これからのまちづくりに
おいても重要なミッションと考
えています。

岡野 ●魅力の定義は、各自の主観で
変わってくるものであると思
います。私は仕事の関係で転居が多
く、これまでいくつかの地域に住ん
でみて、それぞれの景観などは異な
りましたが、いずれも魅力のある
「まち」でした。その中で私が「必要
だと感じた建築物」は、抽象的な表
現になりますが、その機能に調和し
、コミュニティの一部として存在
できるものだと考えます。その地域
の魅力や付加価値を増すことので
きる建築物、今後は、そのような案
件に携わってほしいと思います。
菅原 ●街中に質の高い公共空間が存
在するまちが魅力的だと感じていま
す。米・ニューヨークのブルック
リン・ブリッジ・パークやブライ
アントパークなどの公園では、民間
主導による持続的な維持管理・運
営のための仕組みが導入されてお
り、各種イベントが日常的に催され
、日々、ニューヨーク市民で賑わ
う豊かな公共空間が実現しています。
戦後、欧米へのキャッチアップに
向けて公共空間整備をしてきた日本
でも、ハード整備は成熟段階にあり、

Q6 まちづくりに関わる人材を育てるという視点で、自身の経験の中からなにか感じたことはありますか。

浦部 ●ひと言でいいますと、道化師（ピ
エロ役）の必要性でしょうか。まちづ
くりや地域活性化が成功する条件と
してよく聞く3者。①外部からの視
点をもち古くからのしがらみに囚わ
れない「よそ者」、②斬新で新鮮な
発想と行動力がある「若者」、③時
に周囲から嘲笑されながらも自分の
信じた道を走る「ばか者」と。個人
的にはそれに加えもう一役、道化師
的な「役者」を必要としている気が
します（「ばか者」が進化してその
役割を兼務してもよいと思います）。
それが、ワークショップやまちづ
くりの牽引役となる有能なファシリ
テーターと呼ばれる人になればよい
ですね。そういう役者がオペラやシ
ェイクスピアの戯曲などでもストー
リーを充実させるために登場しま
す。ある時は

今後は公共空間の高質化をはかるた
めの仕組みづくりが重要となって
きます。特に都市の水辺は、1970
年代以降、親水公園や親水護岸など
の各種空間整備がなされてきまし
たが、水辺の利用方法や賑わい創
出のあり方はあまり議論されてき
ませんでした。今後は、賑わいの
ある水辺をいかに創出していくか
が重要となると思います。
平田 ●私にとって魅力的なまちは、
やはり血の通った交流があるまち
だと思います。私はいわゆる新興
住宅地というところに住んでいま
したが、近所の方はとても温かく、
学校から帰ってきた時に家の鍵を
忘れたら隣家で待つて

菅原さんが関わる、横浜の市民組織「水辺荘」が企画したイベントの様子。2012年から開催され、多くの市民が参加し、水辺のスポーツに親しんでいる



切り込み隊長、ある時は接着剤、ある
時は主役にもなる道化師は、話をお
もしろくする（創造する）のに必要
不可欠な存在ではないでしょうか。
落合 ●2013年に本学で新設された
まちづくり工学科で、まちづくりに
関わる人材育成に携わっています。
まちづくりは、建築や土木のように
長い年月をかけて学問として成熟
してきた分野ではありません。時
代の要請を受けてきた学際的で新
しい分野であり、即戦力のある人
材が求められる分野であります。
そのような、社会にでて、即座に
活かせる大学教育とはどのような
ものか、その方法論が求められます。
ひとつには、大学在籍の4年間だけ
で考えるのではなく、卒業後も大
学と連携しながら、在学生と卒業
生と、そして

いる。そういうことが当たり前
になりました。今の「まるがやつ」
のプロジェクトへ携わっている時
にも、とても温かく私たちのこと
を迎えてくれたご近所の方がたく
さんいます。自分の住むまちに愛
着をもち、なにかしたいという想
いをもち、そういった活動をして
いる私たちに感謝をしてくれ、な
にか力になれないかといってくれる
。自分のまちは素敵なおまちだと
、周りの方に思い出させることが
できたプロジェクトだとも思いま
す。こういった地元の方と血の通
った交流をいねいに重ねていく
地道な活動が「魅力的なまち」に
つながっていくと思います。

後藤将人さんが関わった練馬駅北口区有地活用事業「ココネリ」駅ビルの中に回復期リハビリ病院が入る官民複合施設になっている



もうひとつの世界から・第3回

根付彫刻 野口悦宏 (芝工業株式会社 常務取締役)

今回の「もうひとつの世界から」は、建築設備会社・芝工業の野口悦宏さんに寄稿いただいた。江戸の昔に流行した根付彫刻に魅了され、見ているうちに自分でもつくりたくなったという。根付は現代でいうストラップ。特殊な造形物には数々の制約があり、それらをクリアしながら手づくりする醍醐味を語っていただいた。

私の趣味は根付彫刻です。ところで皆さまは「根付(ネツケ)」をご存じでしょうか？

根付は主に江戸時代に大流行した手のひらサイズの日本独自の彫刻で、大人になれば誰もがひとつ以上はもっている生活必需品でした。和服にはポケットがなかったので、お金や小物を運ぶのに巾着袋などの紐を帯の下に通してぶら下げていました。この紐が帯から落ちないように紐の先に滑り止めとしてつけていたものが「根付」です。根付は多様な素材、デザインで生みだされ、今の腕時計のように、安いものからブランドもの的高级品までいろいろとつくられていました。そんな根付に私が出会ったのは、2001年に千葉市美術館で開催された海外根付コレクターのキンゼイコレクション現代根付展でのことでした。能面や神仏像以外で、かつ日本独自の彫刻に初めて生で触れたカルチャーショックは強烈でした。

この出会いで根付に魅了された私は、骨董市などに足繁く通いました。骨董品と触れ合い目が肥えてくると、自分の好きなデザインのものをつくりたくなってきました。いろいろと調べて「日本象牙彫刻会」(現・日本左刃彫刻会)の彫刻教室で彫刻を学ぶことになりました。つくり始めると、今度は制約の多い根付を彫刻する難しさにとりつかれました。

まずデザインに多くの制約があります。紐を通すための穴が必要で、置物と違い紐にぶら下がっているのが360度すべてに見せ場が必要となり、帯の下を通すので掌で包める程度の大きさで、着物を瑕つけないように尖った部分があってはいけない。また、根付の主な材料として象牙がありますが、ワシントン条約以降入手が年々困難になっています。その象牙を彫刻する時に使う、左刃(ひだりば)という専門の彫刻刀も、市販されておらず道具の入手も難しいのです。これらの制約を克服して、使いやすく好きなデザインの根付を完成させる喜びは、本業の建築設備の仕事にも通じています。

教室に通って7年目に「第31回日本の象牙彫刻展」で、未熟ながらも「日本象牙彫刻会新人賞」をいただきました。しかし、プロの「根付師」に手が届く直前で、東日本大震災により彫刻道具に大きな被害があり、そのショックと諸々の環境の変化で彫刻自体から少し距離を置いていました。しかし、一度知ってしまった根付を彫刻する喜びを忘れることができず、今は根付彫刻の再開に向けて徐々に道具や環境を整えているところです。



上/根付「たか飛び込み」象牙彫、銘「光悦」。日本象牙彫刻会新人賞受賞作品。急降下する鷹を、水泳の「高飛び込み」に見立てた、根付特有のことは遊びの作。台座の木目を水の波紋に見立てている。下/根付「ふくら雀」象牙彫、銘「光悦」。「福良雀」とも書き縁起の良い根付。寒い時期に全身の羽毛をふくらませた雀をモチーフとした人気のテーマ。ふつうはもっと簡素化したデザインが多いが、少しリアルにして可愛さを加えた



NOGUCHI Yoshihiro
1973年東京都生まれ。95年日本大学生産工学部建築工学科卒業。97年同大学院修了。日建設計を経て、現在は芝工業(株)で常務取締役として勤務。2001年日本象牙彫刻会(現日本左刃彫刻会)の彫刻教室に入会。02年「日本の象牙彫刻展」初出品。08年「第31回日本の象牙彫刻展」で、新人賞を受賞。雅号は光悦。

ないのですが、ひとつ感じるがあります。地元の方と外部の方が交流することが、とても重要だと思いました。地元の方はなかなか慣れ親しんだ自分のまちを特別だと感じないものです。外部の人にいわれ、初めて自分の住んでいるまちの素晴らしさに気づくことができます。そして、外から訪れた方は地元の方と交流し、さらにそのまちの素晴らしさを感じることができます。その両方の視点が一緒に組み合わせることで、新しいかたちの「おもてなし」や、「まちに対する意識」が生まれるのだと感じました。今のプロジェクトを実行するに当たって、そういった両方の視点の中に、ともに育つという意味での「教育」があるのだと思います。

づくりを展開している地域には、よりよいまちづくりに向けて地域の方がたを牽引し、地域内の合意形成を行っている人物が、行政・民間に関わらず存在し活躍しています。こうした「まちづくりに熱くなれる」人材を育むのも大学教育の重要な役割だと考えており、まちづくりの「現場主義」の考え方を伝えていくことが重要だと思います。平田●私はまだ教育ができる立場では

まちづくり活動に関わっており、現在でも千代田まちづくりプラットフォームの一員として、千代田区の市民まちづくり活動支援などに取り組み、自分なりのまちづくりの考え方を日々アップグレードしています。菅原●まちづくり活動を「自分事」として認識し、積極的に活動できる人物の存在が、魅力的なまちづくりの要になってくると思います。積極的なまち



平田麻実さんが関わった、「まるがやつ」の古民家再生。千葉県大多喜町の築200年の民家を改修し、宿泊施設にした。地元の方々が維持管理に積極的にに関わり、2017年7月から、11月までに460名以上の人たちが利用している

Q7 まちづくりの活動に、日大卒業生であることが直接的または間接的になにか影響を与えましたか。

浦部●私は卒業生ではないですが、さまざまな地域でまちづくり的な活動に関わりますと、学部を越えて日大の卒業生の方にお会いします。行政側・提案側・住民側など立場がさまざま、時に心強く、時に厳しく感じます。前者は、日大関係者としてご協力いただけるということは想像に難くないと思いますが、例えば後者は、他大学や団体はもっと頑張っているというような激励や学生への指導へのご意見でしょうか。共通することは、日大でも地域でも、自分が関係した場所には愛着をもって接していらっしやる姿勢は、まちづくりの活動にも必要不可欠であると感じています。

落合●「石を投げれば日大生に当たる」といいますが、まさにそのことば通り、どの地域に行っても日大卒業生に出会います。だからといって直接的になにかの影響を受けたわけではありませんが、まちづくりの現場では限られた時間の中で、相手との距離を縮めなければいけません。そんな時、大学の先輩

や後輩という共通点から会話が進み、その距離が一気に縮まることがしばしばありました。まちづくりは人と人。日大生であることを最大限に活かすことのできるフィールドなのかもしれません。

後藤●事業パートナーの方が大先輩でたいへんお世話になり、円滑な事業推進につながりました。社内でもたくさん先輩後輩がいるので、仕事を進めていく上で相談がしやすく、ありがたく思っています。同級生もデベロッパーや行政などに就職しているので、それぞれの立場から見たまちづくりの考え方について、ストレートに議論することも貴重な機会です。多くの先輩後輩がいろいろな業界で活躍されていることは、まちづくりという広い分野で活動していますので、活動の可能性が広がるという意味でも非常に力強いです。

菅原●まちづくりには行政・民間企業・市民団体など、多種多様な組織・団体に関わるため、自ずと日大卒業生と一緒にまちづくりの仕事をしていく場面

に遭遇します。最近では、世代の異なる理工学部の海洋建築工学科と建築学科の卒業生の方がたとともに、横浜の水辺利用の取り組みを検討する機会にも恵まれました。こうした機会では、自然と仲間意識が培われた中で取り組みを展開できている印象を受けています。まちづくりのプレーヤーの中に仲間がたくさん存在することは、日大の強みといえるかもしれません。

平田●やはり卒業生が多いので、思わぬところで人との共通点を見つけることができたりします。今の事務所で「まるがやつ」に関わることになったのもそうですし、やはり人との縁や共通点のようなものはとても大切なことだと思います。もうひとつあげると、今回、中村好文先生に「まるがやつ」の蔵を設計していただくことができたこと。他にも渡辺康先生ほか、蔵の設計監理をしてくださった先輩、そんな熱意や愛にあふれた先生や先輩方に会えたことも、日大を卒業できたからこそだと思います。

さよなら5号館

理工学部駿河台校舎5号館をふりかえる

第1回◎意匠設計者のことば

現在、理工学部の駿河台キャンパスでは、「南棟(仮称)」という新しい校舎の建設が進んでいる。その新校舎完成にともない、永い間、建築学科の活動のベースとなってきた5号館が、残念ながら取り壊される。5号館は、宮川英二先生を始め、多くの建築学科教員が関わりながら設計が進められた。当時のことは、建築学科の学内誌『連子』の中に関係者のことばとして残っている。そこで、来年9月から解体される5号館について、これから3号連続で取り上げ、今一度、その意味を問い直してみることとした。

第1回目の今回は、『連子』に掲載された、意匠設計者である宮川英二先生の文章をふりかえる。なお原稿再録に当たっては、当時の文章の雰囲気を残すため、註を除き原文通りとした。(佐藤慎也/広報委員会委員長)

§時代に寄り添った設計

最初に1958年2月発行の『連子』に掲載された、「日進館(仮称)の設計について」を紹介する。着工が3月なので、まさにその直前に書かれた文章である(文末には「1958.1.27」と記載)。設計時は「日進館」と呼ばれていたようだ。また、隣接する敷地へのキャンパス拡張が計画されており、本郷通り側からの透視図とともに、5号館とブリッジでつながれた将来建物の立面図も付されている。その後、同敷地に9号館が実現した。

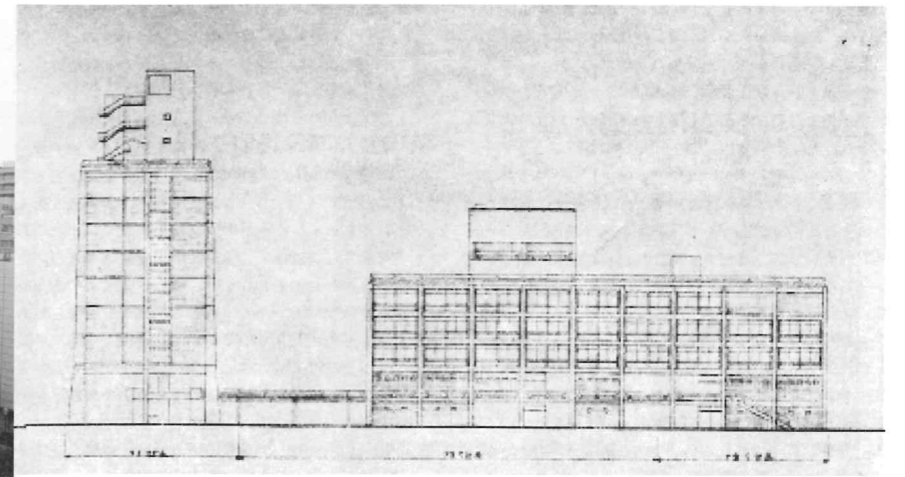
建築学科教室で設計していた日進館(仮称)が愈々着工のはこびになつたので、この誌上をかりてその設計について述べてみたい。(中略)そして、八重洲旅館の跡まで将来拡張ができるように、一連の全体計画が行はれている。これは私だけの考え方もかもしれないが、大学の建物はただ廉ければそれで良いというものではなく、建物が学生に影響するところは大きいし、とくに、研究室で設計するものは、未解決の問題に積極的にとりくんで、建築界にも寄与し、学生の教育にも役立てる、という一面があるべきだと思う。それで、この建物も計画や構造の上で、数々の新しい試みがおこなわれている。建築造形を頼りず表現についていうと、この建物のばあい、私たちはネオン

を点じたり、大理石を貼つたりする、金ピカの商業主義をまづ避けた。つぎに、筋の通らない表現があつたり、個人の趣味に傾くことのないようにスタッフ一同のディスカッションを経ることにした。そして、世界的にみて、現代建築の正しい潮流と思はれる線を太く通して、素朴で強靱な表現をこころみようとした。したがって、華麗なもの、繊細なもの、饒舌なもの、予期して待つような甘さ、流行等、われわれをデレタンチズムの虜にすると思われるようなものは一切避け、若々しいエネルギーがぶつかつてきても、がっしりと受止めて撥ねかえすことができる歯ごたえのあるもの、さいしよは、つつばねるように冷たいが、いつまでも、ジーンと迫るものが何かある、というような建物、そういうものを造ろうと願つた。また、学校の建物のメンテナンスの悪いことや、乱暴に扱はれることも考慮して、使用材料はつとめて整理し、細部的な表現はできるだけ省略し、荒彫りな、大まかな構成と各部のプロポーションの美しさに頼ることにした。つぎに、この建物にとられた新しい試みをいうと、構造ではshell方式の基礎、その他であり、計画の面では、前川先生の謂言、technological approachの考え方を私なりに解釈して、実践にうつしたことである。

§モダニズム建築としての5号館

この建物は外観に現場打ちの柱、梁をそのまま表わしている。仕上はコンクリート打放し仕上である。このように、軸材の構成をそのまま表現にもちいるときは、仕上げがリシンのような塗物では肌理がソフトで力が弱くなるし、タイルや石貼では長い間に剥脱の危険がある。(中略)けつきよく、現在のところ、コンクリートの仕上は、施工さえ信頼できれば、打放しが最良だとわれわれは思っている。

しかし、打放し仕上はコストが高いものであるから、最少限にとどめなければならない。とくに、拡がりのある面では仕事は一層難しくなる。それで、現場打コンクリートの打放し仕上は、柱、梁の軸部のみにとどめ(中略)壁は一切、Prefabrication化された構法を用いることにした。すなわち、桁方向の壁面はPrecast concrete材とアルミニウム製サッシュで構成し、妻壁はテラカッタ・ホローブリックを積み上げる方法がとられている。(中略)つぎに、建物の内部であるが、学校の建物のように、コンクリートの耐用命数100年以上の間に、時折使い方が変わるといようなものでは、内部の空間にフレキシビリティをもたせ、謂言universal spaceにしておかねばならない。それで、この建物では、3階



左/2008年に行われた改修後の5号館。制振ダンパーを設置するなど、大がかりな改修を行った。現在は、理工学部建築学科の研究室、製図室などが集まる。上/『連子』(1958年2月)に掲載された、5号館の立面図。右側には実現しなかった校舎とデッキでつながれている

以上の内部は全部、パネル・ボードとユニット本箱によるフリー・パーティション形式を採用して、大部屋にも、小部屋にも、仕上を損傷することなく、容易に変換できるようになっている。このばあい、総ての個所に同一規格のパーティションが使用できるためには、平面はmodular systemによつて割付けられる必要がある。そのために、中柱は各階とも同一の大きさにして、外柱も内面は各階一つの垂直面上にそろえ、柱が下層につれて太くなる分は外部に向かつて太るようになっていく。また、部屋割り区劃は大梁、小梁の所を規準にしているので垂直方向でも梁下のクリアランスが各階とも一定になる必要があり、したがって、階層により梁成が減れば、それだけ階高も低くなるようになっていく。(中略)

アーケード吹抜部はこの設計のなかで唯一の贅沢な部分である。御承知のように、わが理工学部は建物の外がすぐ公道で、いわゆる構内敷地というものが無い。このことが、わが学園を非常に潤のないものになっている。そこで、われわれはエレベーター・コアの一劃に半屋外的なこの部分を設けて、友人との語らいの場や、見学会の集合場処など、広場的な性格に利用されるように計画した。(中略)コア一部分は将来八重洲の方に建物が延びた場合、その水平動線と交叉するようになっていく。(中略)

屋上には物見塔、芝貼、植込、ベンチを設け、気候の良い季節には都会生活にも光と緑が得られるように計画されている。

§計画という理論と工事という実践

続いて、1959年11月発行の『連子』に掲載された「設計以後(5号館実施についての覚書)」を紹介する(文末には「1959・7」と記載)。まだ工事中でありながら、その状況を詳細に述べながら、理論がどのように実践されたのかを検証している。

1958.3月より工事が進められていた5号館は、漸く完成をみようとしている。(中略)こんにち、建築の近代化をおすすめるためには、われわれ周囲の状況——主として、社会的、経済的要請——から建築産業の工業化の強化が一つの重要な要素となつてきている。そして、建築の工業化は一つの建築の中で、工場において生産される部分が一つでも増加して行くことが必要な段階である。われわれは、こんにちの建築家に課せられたこれらの責務を少しでも分ちもとうと、この学校の建築においてprefab化を中心に建築技術の追求を強くこころみてみた。

その後は8ページにわたり、以下の項目で計画と工事の関係が詳細に

述べられていく。プラン/山留・基礎/打放しコンクリート・型枠/スラブ天端のナデ切り/プレキャスト・コンクリートのスタッド及び窓台/プレキャスト・コンクリート窓枠/テラカッタ・ホーロー・ブロック積み/アルミニウム・サッシュ/スチール・ドア/移動間仕切/誤差修正に対する二・三の意見/パイプシャッター/プレキャスト・コンクリート製レリーフ/成形アルミ天井/スイッチボード・消火栓ボックス/現場仕事と工場加工/防音・防塵・給電・給水。さらに、各部の現場写真やプレキャスト・コンクリートと窓枠などの詳細図が付されている。そして、末尾を以下のように締めている。

工事のあとを振り返ってみると、都合よくいつた処もあり、具合の悪い処もあつた。まずかつた処は次の6号館(図書館)の折には改善したいと思つている。

建物を使用していただく方も、いつまでも「5号館」が美しく、また機能を失わないよう労つて使つていただきたい。とくに建築科の人々には、このスペースが学園として良い環境に育つよう、一般の方々に指導していただきたい。

とにかく、18ヶ月間の長きにわたつて、スタッフ一同、全力をあげての活動の結果であるから、私としては悔いするところはない。

追悼

長年、日本大学の建築教育に携わってこられた小林美夫先生が逝去されました。大学を辞した後、永らく病床に伏しておられました。小林先生の研究室に所属し、先生の活躍ぶりを身近にみてきた伊澤岬先生に偲んでいただきました。



小林美夫先生

元理工学部海洋建築工学科教授 享年89歳(1980年ころ撮影した写真)

小林美夫先生は十年前程に不整脈で入院し、その後永らく自宅での療養を続けておりましたが、10月5日に心不全のため、戻らぬ人となりました。享年89歳でした。

先生の代表作、岩手県営体育館(1967年)は、ザハ・ハデイド設計の新国立競技場案と同様ダブルキールアーチ構造方式による凛とした美しさがただよう建築です。このザハ案がきっかけで、岩手県営体育館は半世紀にわたって健在との報道がされました。ダブルキールアーチの最初となる体育館として、多くの技術的蓄積がデザインに開花した名作です。

丹下健三の代表作東京オリンピック代々木体育館を、建築評論家の五十嵐太郎は「むろん、突然変異で登場した唯一無二の丹下オリジナルではない。モダニズムが導入した鉄筋コンクリートの構造技術が戦後にさまざまな造形を可能にした時代の産物でもある」と評し、国家的施設としての代々木と岩手の国民体育大会の施設との大きな違いがあるものの、二つの体育館にはその時代の技術的合理性と、当時の国家的・団体的イベントが求めている精神性を空間表現にまで高めた相補う作品群と考えます。この特徴的な構造は斎藤公男名誉教授が小野新先生とともに担当、斎藤は代々木と岩手の両方のキック・オフ・ミーティングに参加した構造家となります。

小林先生は故斎藤謙次教授のもと、卒業論文で「鉄筋コンクリートラーメンの柱・梁断面の仮定法」をまとめ、卒業後直ちにNHKに勤めました。当時の最先端の音環境や空調設備システ

ムの技術を学び、論文「オーデトリリュームのポリリューム」をまとめています。これら若き日の論文は、常に高い技術力をバックに創作されてきた先生のつくる建築の根源となるもので、岩手にもつながっていきました。

理工学部学生の誇りであった研修施設・工科山の家は、敷地が狭隘かつ急斜面のため、建築面積を小さく重層とし、特徴となる片流れ屋根のトップヘビーな外観を形成します。屋根は屋上積雪の不均衡を避けるとともに、屋根の向きと常風向と眺望とを一致させて、山頂の極地に建つ建築への深い洞察に裏づけられた作品ですが、残念ながら1988年に閉鎖され、取り壊されてしまいました。

また、風速60mの環境で究極の耐久性が求められる南極観測隊建物は、スノードリフト(吹き溜り)で開口部が雪に塞がれ出入りが困難となることを防ぐため、鉄骨トラスによって全体を高床式構造とした木造プレハブ建築で、わが国のプレハブ住宅の原点ともなるものです。

先生の作品系譜は、大きく岩手、山の家に代表される「屋根のデザイン」に加えて、「レンガのデザイン」「階段のデザイン」が加わります。

レンガのデザインは、東京薬科大学と静岡県立大学(BCS賞)、日本大学理工学部船橋キャンパス「ブラザ習志野(BCS賞)」や「習志野図書館」が代表的なものです。いずれもレンガと打ち放しコンクリートによる特徴的な壁面構成で、特に図書館は当時のレンガ建築ブームの原点となるものです。レンガはコンクリートの耐久性に配慮

しての選択で、これによって自然素材に近いレンガによる一連の作品系譜が生まれました。

建築家としての先生は優れた教育者でもありました。大学紛争直後の閉塞感を打開すべく、卒業設計の優秀作品集の出版を起案し、教育活動のシンボルと位置づけました。この作品集は建築学科でより進化して継続され、その後の海洋建築工学科でも脈々と引き継がれています。

また、今日では一般的となりました修士設計を、この時期、他大学に先んじて建築学、海洋建築工学の両専攻でスタートさせるなど、革新的なデザイン教育を多く生み出してきました。これらの教育で学生・院生の設計意欲も高まり、日本建築学会の学生コンペでの一等入賞や、毎日新聞の全国大学学生デザインコンクールにおいて8回もの大学日本一に輝きました。こうした先進的な教育活動に対し、1993年、日本工学教育協会から「設計教育の成果」として業績賞を受賞しています。

亡くなる1年前、私は桜建会が主催したNUアート展に私家版「建築家小林美夫デザイン論 美しいダブルアーチの建築」を出展しました。小林先生にもお届けしましたら、病床でよく見ておられたと、家人の方から伺いました。安らかに眠りください。

また先生は、生前の2008年に瑞宝中綬章を、没後には叙位従五位が贈られました。

伊澤岬(日本大学名誉教授)

追悼

1971年より生産工学部で教鞭を執られてきた山口廣先生が逝去されました。学者として、教育者として、永きにわたって活躍され、その警咳に接してきた大川三雄先生に山口先生への想いを寄せていただきました。



山口廣先生

日本大学名誉教授 享年91歳(建築学会業績賞受賞の祝賀会で 重井真弓さん撮影)

山口廣先生は本年7月12日に91歳の生涯を終えられました。細身で長身、豊かな白髪、静かな佇まいと穏やかな口調は、まさに学者そのもので、古今東西にわたる建築史の幅広い学識を備えられていました。しかし、機会あるごとに「僕は教育者であって、学者ではない」、「いつも教えることを前提に勉強と研究を続けてきた」と話されていました。それは小学校の代用教員に始まり、中学校と工業高校の教員を経て、大学教授になったという極めて異例なご自身の経歴をふまえた発言であったように思われます。

日本大学との関係は、工業高校の教師として働きながら建築学科の夜間コースに学んだことが始まりで、卒業研究は小林文次先生の建築史研究室に所属されました。研究テーマはオランダのデ・ステイル派。昼間の仕事を終えてから研究室に来ると、書庫に籠り、夜遅くまで文献の収集と検証に取り組まれていたと聞いています。晩年になっても「小林先生の蔵書の中に〇〇という資料があるはずだから探してほしい」といった問い合わせをなん度かいただき、その記憶力に驚かされたことが度々あります。

学業に熱心であったことから、小林先生が大学院進学を勧め、近代建築史の先駆者である明治大学の神代雄一郎先生を紹介、そこにいた堀口捨巳先生と運命的な出会いをされました。モダニズム建築運動の先駆者である堀口先生から、戦前期の留学時に収集された膨大なドイツ語文献を借り受けて、『ドイツ表現派の建築』をまとめ、それを博士論文とされたからです。

紆余曲折を経られ、たいへんなご苦労をしてきた先生ですが、教育と研究に対する一途な想いは生涯変わることなく、大勢の方々から信頼かつ尊敬され、大きな人の輪を通じて学会活動や保存運動などにも積極的でした。

デ・ステイル派とドイツ表現派という欧米近代建築史の研究に始まり、生産工学部に移られてからは日本近代建築史の分野に取り組みされました。フィールド・ワークで発見された市井の無名の建築物への暖かい眼差し、また建築分野の初等中等教育に関する研究などは、自身の経歴や体験に基づく先生ならではの視点でした。この分野の研究は最初の愛弟子となった清水慶一さんに継承され、学位論文としてまとめられています。清水さんは、大学院修了後に初の建築出身学芸員として国立科学博物館で活躍されました。

東京大学生産技術研究所の村松貞次郎先生が監修された『虚構の崩壊 日本近代建築史再考』(新建築社)は、近江栄先生や長谷川堯先生らと共同で執筆されたもので、建築界に大きな話題を投げかけました。この中に、大工の息子として生まれ、独力で這い上がって近代建築家の仲間入りした山口文象に焦点を当てた「近代建築再考[陰の系譜]」を寄稿されています。

さらに『日本の建築[明治・大正・昭和]』(三省堂、全10巻)の企画にも参加。その時に執筆を担当された建築家の安井武雄に関してさらに詳細な調査研究を行い、『自由様式への道 建築家安井武雄伝』(南洋堂書店)をまとめました。この本は建築家研究の優れた事例として評価され日本建築学会

賞を受賞。この頃には学会の90周年事業である『近代日本建築学発達史』(丸善)の建築論部門の主旨も担当されるなど、日本近代建築史分野の第一人者としての地位を築かれていました。

晩年の先生が特に関心をもたれていたのが郊外住宅地研究です。世田谷美術館で開催された展覧会の企画運営に始まり、若い研究者たちと一緒にまとめあげた『郊外住宅地の系譜』(鹿島出版会)は、この分野での最初の成果となりました。この分野は清水慶一さんに次ぐ愛弟子の藤谷陽悦さんに受け継がれました。

幅広い研究分野での業績は語りつくせませんが、やはり教育者としての業績も忘れることはできません。日本建築学会に創設された「教育賞」の第1回の受賞は、先生にもっとも相応しい栄誉であったといえます。ソフトながら熱のこもった語り口の授業によって、大勢の学生に建築の面白さ、奥深さを伝えてきました。また清水、藤谷という優れた研究者を世に送り出しましたが、この二人の愛弟子たちが次々と病に倒れてしまいました。先生の無念さははかり知れません。

本好きで知られる先生ですが、3年ほど前に膨大な蔵書をすべて処分されました。おそらくは身を切るような想いであったと思います。「伝導院探心庵建居士」という戒名そのままに、静かな情熱をもち続けた研究者、熱い想いを抱かれた教育者としての生涯には、ただただ敬服するばかりです。ご冥福をお祈り申し上げます。

大川三雄(日本大学理工学部特任教授)

事務局だより

第38回建築講座 & 特別維持会員懇親会開催

11月15日18時より、理工学部駿河台校舎1号館で、第38回建築

講座が行われた。

今回は、和田章先生(東京工業大学名誉教授)、郭献群氏(構造計画研究所)をお招きし、熊本地震の教訓・熊本城の現況と復原についてご

講演いただいた。その後19時より、特別維持会員の懇親会「桜建ふれあい2017」が、同1号館カフェテリアで開催された。77名の参加者が集い、盛会に終わった。

偲ぶ会ゴルフコンペ開催

9月18日～19日に、JGMゴルフクラブ高崎ロイヤルオークコースにて、偲ぶ会のゴルフコンペが開催

された。参加者は16名、優勝者は吉田武氏であった。

研修旅行報告

10月7日～9日に、奈良研修旅行を実施した。1日目は奈良県国立博物館の改修された展示室内と、博物館、仏像館。2日目は今回のメインイベントである薬師寺東塔の改修工事中の現場見学。薬師寺で唯一創

建当時より1300年現存する建物を、特別なはからいで見学できた。特別公開の食堂でご本尊「阿彌陀三尊浄土図」と壁画「伝来の道と薬師寺」を鑑賞。その後、奈良の町を散策、そして京都、浄瑠璃寺にて三重塔の薬師如来、阿弥陀如来に合掌し、夜は奈良老舗料亭の菊水楼で懐石料理

に舌鼓。3日目は国内最大級の国宝、春日大社を参拝し、耐震改修を終えた春日大社国宝殿を見学。そして部屋数の多い志賀直哉旧居を見て、最後は開業100年の奈良ホテルでランチ。参加者は16名。古都、社寺、食、酒、会話を十分満喫する中身の濃い旅行であった。

NUアート展開催

第5回アート展が、10月16日

～21日まで、理工学部駿河台キャンパス1号館CSTギャラリーにて開催された。今回の出展者は68名

(一般40名+学生28名)であり、初日の夕方から懇親パーティーが同1号館カフェテリアで盛大に行われた。

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務(平成29年6月9日～11月7日) 3名

道明 裕毅 理工建-H25 日本大学理工学部 梅本 大勝 他大学 (株)テイエム技建
平野 譲 生産工-61 (株)熊谷組

賛助会員入会企業のご紹介

新規入会法人(平成29年6月9日～11月7日) 5社

西武建設(株) アウェイ建築評価ネット(株) 三井住友建設(株)
株木建設(株) 青木あすなる建設(株)

桜建会報 NO.110 2017-December
発行人 齋藤公男
編集 桜門建築会広報委員会
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
日本大学理工学部内

広報委員会
委員長 佐藤慎也(理工学部建築学科)
副委員長 塩川博義(生産工学部建築工学科)
矢代真己(短期大学部建築・生活デザイン学科)
委員 大川三雄(理工学部建築学科)
山本和清(理工学部海洋建築工学科)
亀井靖子(生産工学部建築工学科)
齋藤俊克(工学部建築学科)
北川健太(sekai)
大西正紀(mosaki)
西山麻夕美(フリー編集者)

桜建会事務局
住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
理工学部5号館7階574A号室
TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216
E-mail kaiin@okenkai.jp
ホームページ http://www.okenkai.jp/
専任/星野麻衣子
非常勤/櫻井佐和、大木明子
業務時間/AM10:00～PM5:00(月～金)

学部ニュース

工 トピックス①

◎速水清孝教授は東京建築士会機関誌『建築東京』3月号(vol.53 No.3)に「建築士のこれからとこれからの建築士」と題し寄稿された。

◎浦部智義准教授と浦部研究室が計画・設計に関わった「希望ヶ丘プロジェクト-小規模集落型木造復興モデル群-」が日本建築学会作品100選に選ばれ『作品選集2017』に掲載された。

◎浦部准教授と浦部研究室が計画・設計に関わった「針生ほしっぱの家」が、第12回木の建築賞(やま・もり再生賞)を受賞した。

◎長谷川周平君(浦部研、2016年度卒)の卒業設計「保原駅・前-文化と生業がつくる連続体-」がJIA東北学生卒業設計コンクール2017の優秀賞を受賞。本年の全国学生卒業設計コンクールに出展した。

理 工 海洋建築工学科トピックス

◎新宮清志名誉教授は、日本建築学会歴史的大規模木造宿泊施設の安全性能確保特別研究委員会委員長(2015年度～16年度)を務め、幹事の藤治工学院大学教授、花里利一三重大学教授、長谷見雄二早稲田大学教授他とともに調査研究を行い、『特別研究57 歴史的価値を持つ大規模な木造宿泊施設の耐震的・防火的安全性を確保するための技術的・法的側面からの調査研究』(2017年3月、A4版、230ページ)を刊行した。◎7月22日に開催した日本沿岸域学会・平成29年度全国大会(熊本)の研究討論会で、大学院生3名が優秀講演賞を受賞した。同賞は、日本沿岸域学会・研究討論会で優れた研究発表講演を行った若手会員を対象に表彰されるもので、研究ならびに講演技術の向上に寄与するとともに、研究討論会の活性化に貢献することを目的としている。受賞学生氏名と研究タイトルは以下。

・石橋榮稔(居駒・恵藤研、M2)「港湾における海域津波ハザードマップの開発に関する研究」
・渋谷省吾(居駒・恵藤研、M2)「OWC型



ソウルの消防本部で講演した森山教授(前列右から2番目)

◎森山修治教授は4月21日、韓国ソウル消防本部で「日本における超高層ビルの煙制御設計と方向性」と題する講演を行った。

◎森山教授は6月2日、石膏ボード工業会より、石膏ボード賞(特別功労賞)を授与された。

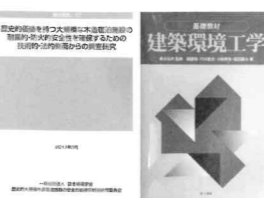
短 大 トピックス

◎酒匂教明短大准教授は、「小規模建築物(戸建て住宅)を対象とした基礎に関する一連の研究」により、平成29年度理工学部学術賞を受賞した。

波力発電装置による消波ケーソンの利用の可能性に関する考察」

・橋本宗侍(大塚研、M1)「真間川河口前面海域における放射性セシウムの堆積分布について」

◎波田雅也君(北嶋研、D1)は、コンクリート工学年次大会2017(仙台)で、論文「ダイス・ロッド式摩擦ダンパーを用いた橋梁模型の振動台実験」を発表し、論文内容と発表内容が優れている40歳未満の研究者として表彰された。また、新保拓美君(北嶋研、M1)は、2017年度日本建築学会大会(中国)学術講演会で、論文「レンズダンパーを取り付けたRC造間柱の構造性能に関する実験的研究(その2 実験結果および検討)」が、「若手優秀発表賞(構造部門振動分野)」を受賞した。



左は新宮名誉教授の共著『特別研究57』の表紙。右は富田准教授の共著『基礎教材建築環境工学』の表紙

理 工 建築学科トピックス①

◎宮里直也教授が第28回JSCA賞「業績賞」(主催/日本建築構造技術者協会)を受賞した。本賞は、構造に関連した分野で構造設計者あるいは技術者の職能向上や社会的活動の活性化に貢献した者などに贈られる。受賞内容は、「国内外のAND巡回展による構造設計(者)の顕在化と活性化への貢献」。

◎「第39回コンクリート工学講演会」(主催/日本コンクリート工学会)において、河野圭一郎君(長沼・田嶋研、M2)の論文「三次元非線形FEM解析に基づく偏心RC造骨組のねじれ抵抗機構の考察」と、建築学専攻博士課程修了の荒巻卓見君(中田・宮田研)の論文「在来型枠工法におけるセパレータの割付けおよび内端太の構成が異なる壁型枠の変形に関する一考察」が「年次論文奨励賞」を受賞した。

◎「第33回釜山国際建築大展2017」(主催/韓国建築家協会釜山建築家会、日本建築家協会近畿支部、天津市建築学会)で、稲庭香歩さん(佐藤光彦研、M1)の作品「Update housing born from gap」が「銀賞」を、櫻井翔太君(山中研、M1)の作品「月島 Clearance」と横山大貴君(今村研、M1)の作品「Fishermen shiphouse」が「奨励賞」を受賞した。◎「2017木の家設計グランプリ」(主催/木の家専門店 谷口工務店)で、横山大貴君(今村研、M1)、藤井将大君(佐藤光彦研、M1)、佐藤千香さん(山崎研、M1)の作品「小さな小屋が集まる大きな家」が「審査員賞(松岡拓公雄)」を受賞した。

◎「全国合同建築卒業設計展 卒、17」(主催/「卒、17」実行委員会)で、伊東亮祐君(佐藤光彦研、M1)の作品「第一海堡の九相図」が「ゲストクリティーク賞・種田元晴賞」を受賞した。◎富田隆太准教授の共著書『基礎教材建築環境工学』(井上書院)が刊行された。本書は、大学生、専門学校生などの初学者を対象に、建築環境工学の基本分野である音環境、熱環境、空気環境、光環境についてまとめられたものである。

理工

建築学科トピックス②

◎「第4回POLUS-ポラス-学生・建築デザインコンペティション」(主催/ポラスグループ)で、永田琴乃さん(田所研、M2)と建築学科卒業の稲葉来美さん(佐藤光彦研卒、現横浜国立大学大学院)の作品「生きる蔵を手伝う家」が「最優秀賞」を受賞した。

◎「学生照明展2017」(主催/港区立エコプラザ+学生照明展2017実行委員会)で、菊池毅君(今村研、M2)の作品「SENSAI ヒカリ」が「優秀賞」を受賞。学生の考えるあかりを、エコロジーの観点から製作された「光環境模型」、「照明器具」、「ライティングアート」で提案するもの。

◎「学生サマーセミナー2017『集積あるいは変化するストラクチャー・アート』」(主催/日本建築学会)で、4年の小川舞さん、進藤隆太君、森下諒君、矢ヶ崎拓人君、M1の鴛海昂君(すべて岡田・宮里研)の作品「Reciprocal Dome」が優秀賞を受賞した。

◎「第7回JPM『夢の賃貸住宅』学生コンテスト」(主催/日本賃貸住宅管理協会)で、増田俊君(今村研、M1)と横山大貴君(同)の作品「賃貸図書住宅 としょみちのある暮らし」が「特別協賛会員賞(東急住宅リース賞)」を受賞。

◎「平成29年度日本造園学会学生公開アイデアコンペ」(主催/日本造園学会)で、高須信博君(山崎研、4年)と白井ひとみさん(同)の作品「都市に棲まう大蛇」が特別賞(藤沢市長賞)を受賞。テーマは「藤沢の軸をデザインする〜北から南に、南から北へ〜」。

◎「第17回学生立体アートコンペティション」(主催/アーバネットコーポレーション)で、野下啓太君(今村研、M2)の作品「Re:Spiral」が入選した。「マンションのエントランスホールに展示する立体アート」を求めるもの。

◎「JIA 全国学生卒業設計コンクール2017」(主催/日本建築家協会全国学生卒業設計コンクール実行委員会)で、建築学科を卒業した成潜魏さん(佐藤光彦研、現在東京大学大学院)の作品「城中村を、つなぐ」が「審査委員特別賞・名和賞」を受賞した。



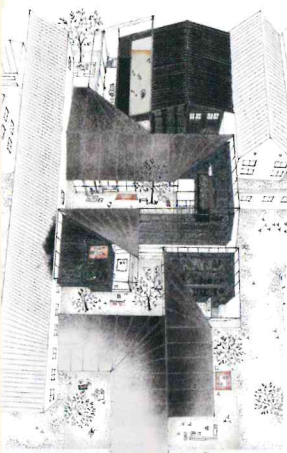
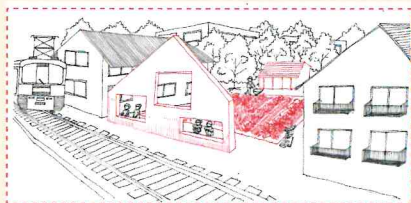
上/「多様化する集積梁」の模型。右/表彰された海老澤さん、漆原君、我妻君。(左から)

工

トピックス②

◎全国陶器瓦工業組合連合会主催の第4回賞賞学生アイデアコンペティションで、福田晴也君(浦部研、4年)・柳沼明日香さん(同)・森泉友希君(渡部研、4年)の作品「時の積層 都市の記憶にオアシスを」が佳作入選した。

◎日本建築構造技術者協会東北支部主催の構造デザインコンテスト(学生の部)で、漆原秀明君(浅里研、M2)、我妻佑磨君(浦部研、M2)、海老澤奈苗さん(浅里研、4年)の作品「多様化する集積梁-敷地の要素から組み立てる-」が最優秀賞と最多得票賞を受賞した。



上/高須君、白井さんの「都市に住まう大蛇」左/永田さん、稲葉さんの「生きる蔵を手伝う家」

左/増田君、横山君の「賃貸図書住宅」。右/菊池君の「SENSAI ヒカリ」



生産工

トピックス

◎「JIA(日本建築家協会)全国学生卒業設計コンクール2017」において、杉山未沙さん(篠崎研)の作品「思いを受けとめ、届ける。」が銅賞(全国3位)を受賞した。

◎建築系学生奨励事業第17回卒業設計コンクール(主催/埼玉建築設計監理協会)で、埼玉賞を受賞した福田奎也君(篠崎研)の作品「あばれ櫓」が、埼玉県吉川市庁舎に展示された。

◎2017年度日本建築学会設計競技「地域の素材から立ち現れる建築」で、小室昂久君・上山友理佳さん・北澤一樹君・清水康之介君(岩田研、4年)の作品「らんたんの伸呼吸-空と地面をつなぐ和紙-」がタジマ奨励賞・東海支部入選を、日野一貴君、山崎悠祐君、坪井里穂さん(岩田研院生)の作品「藁の廟」と、田中良君(廣田・永井研、M2)、加藤慎也君(大内研、M2)、望月雄馬君(廣田研、M1)、長谷川岳暉君(北野研、4年)の作品「電柱穀蔵(でんちゅうこくぞう)」が北陸支部入選した。

◎2017年度日本建築学会 技術部門設計競技「ユニバーサル社会を支える環境技術 多彩な利用者の安全快適な環境デザインをめざして」で、大内研究室がNPO法人PADMと共同で開発した「WheelLog」(<https://www.wheelog.com/hp/>)が優秀賞を受賞した。

◎山岸輝樹助教は、日本式学校の設計指導の功績を讃えられ、8月22日、エジプト教育省の副大臣施設局長のユースリー氏から感謝の記念として盾が贈呈された。なお、日本政府はカイロ市内に日本式学校を100校建設する事業に経済援助を行っている。

左上/小室君、上山さん、北澤君、清水君の「らんたんの伸呼吸」。左下/日野君、山崎君、坪井さんの「藁の廟」。右上/「あばれ櫓」で表彰された福田君(右)と吉川市長の中原恵人氏。右下/「あばれ櫓」

